

ルカの洗礼者ヨハネ像

嶺 重 淑

序

新約聖書の福音書の記述において、洗礼者ヨハネが重要な位置を占めていることは言うまでもない。事実、各福音書において、ヨハネはイエスの道を備える先駆者として描かれている（マタ3:1以下、マコ1:2以下、ルカ1:5以下、ヨハ1:6以下）。もっとも、ヨハネに関する各福音書の記述内容は一様ではなく、そこから単一のヨハネ像を導き出すことは不可能であり、むしろそこには、各福音書記者それぞれのヨハネ像が反映されている¹。

本稿では、ルカによって記されたとされるルカ福音書とその続編である使徒行伝に注目し、これらのルカ文書におけるヨハネ像に焦点を当てるが、双方の文書にはヨハネに言及する独自の記事が数多く含まれており、特徴的なヨハネ像が認められる²。洗礼者ヨハネを意味する Ἰωάννης は、新約用例計91回中33回がルカ文書に含まれているが（マタイ23回、マルコ16回、ルカ24回、ヨハネ19回、

1 洗礼者ヨハネについてはヨセフスの著作にも言及されているが（『ユダヤ古代誌』18.5.2）、このヨセフスの描写も各福音書の記述とは多くの点で異なっており、その意味でも、ヨハネの歴史の実像を厳密に再構成するのは至難の業と言える。

2 ルカのヨハネ像については、O. Böcher, *Lukas und Johannes der Täufer*, *SNTU*. A 4 (1982) 27-44; J. Ernst, *Johannes der Täufer. Der Lehrer Jesu?*, Freiburg/Basel/Wien 1994; J. A., Fitzmyer, *Luke the Theologian: Aspects of His Teaching*, New York/Mahwah 1989, pp. 86-116; B. Reicke, *Die Verkündigung des Täufers nach Lukas*, in: A. Fuchs (Hg.), *Jesus in der Verkündigung der Kirche* (SNTU. A 1), Linz 1976, pp. 50-61; S. Yoshida, *Die Frage nach dem Jüngerkreis Johannes des Täufers*, *AJBI* 38 (2012) 79-95; 吉田新『バプテスマのヨハネ』（聖書の研究シリーズ66）、教文館、2012年等を参照。

使徒行伝9回)、以下、個々の箇所を厳密に検討していくことにより、ルカにおけるヨハネの人物像の特質について考察していきたい。

1. ルカ福音書における洗礼者ヨハネ

ルカ福音書において洗礼者ヨハネ (Ἰωάννης) は計24回言及されている(ルカ1:13, 60, 63; 3:2, 15, 16, 20; 5:33; 7:18^{×2}, 20, 22, 24^{×2}, 28, 29, 33; 9:7, 9, 19; 11:1; 16:16; 20:4, 6)。ここでは、ヨハネが言及されている各段落の検討を通して、そのヨハネ像の特徴を確認していくことにする。

1.1. 誕生物語 (ルカ1:1-2:52)³

ルカの誕生物語は、①ヨハネの誕生告知(1:5-25)、②イエスの誕生告知(1:26-38)、③マリアとエリサベトの出会い(1:39-56)、④ヨハネの誕生(1:57-80)、⑤イエスの誕生(2:1-21)、⑥イエスの神殿奉獻(2:22-40)、⑦神殿における少年イエス(2:41-52)という計7つの部分から構成されており、洗礼者ヨハネとイエスの誕生の出来事が交互に折り重なるように描かれている。ルカはこの誕生物語を、複数の資料を用いて編集的に構成したと考えられるが、ヨハネとイエスの誕生物語の結合はルカ以前の伝承に遡るものと想定される⁴。以下、ヨハネに言及し

³ ルカ1:5-2:52の一連の物語は、末尾に少年時代のイエスのエピソード(ルカ2:41-52)を含んでいるという意味では「イエスの誕生・幼少期物語」とすべきところであるが、この一連の物語の中心的主題はあくまでもイエスの誕生であることから、本稿ではこの箇所全体を「誕生物語」として扱うことにする。

⁴ ルカの誕生物語の伝承から編集に至るプロセスについては、拙著『ルカ神学の探究』、教文館、2012年、87-88頁を参照。なお、一部の研究者(F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas*, I (EKK III/1), Zürich/Neukirchen-Vluyn 1989, p. 48他)は、ルカ自らが両者の誕生物語を結合したと主張しているが、ヨハネとイエス双方の誕生告知の物語(①と②)を前提とするマリアのエリサベト訪問のエピソード(ルカ1:40-45)が、多くの非ルカのな文体や用語を含んでおり(J. Jeremias, *Die Sprache des Lukasevangeliums. Redaktion und Tradition im Nicht-Markusstoff des dritten Evangeliums* (KEK Sonderband), Göttingen 1980, pp. 56-59参照)、パレスチナ的背景をもっていると考えられることから、両者はルカ以前に結合していたものと考えられる。その一方で、吉田新『バプテスマのヨハネ』(聖書の研究シリーズ66)、教文館、2012年、24頁は、両者の誕生物語は最初から結合していたと主張しているが、両者の誕生そのものに関する記述(④と⑤)についてはそれほど顕著な並行性は確認できないことから、説得力に欠ける。

ている個々の箇所の詳細について箇条書きで述べていくことにする。

- (1) 冒頭のヨハネの誕生告知の場面で、天使は生まれて来るヨハネの将来の働きについて、彼は神の前に、イエスと同様（ルカ1:32）、「大いなる者」（μέγας）となり（ルカ7:28参照）、ぶどう酒や他の酒を飲まず、母の胎内にいるときから聖霊に満たされ、イスラエルの多くの子らを神のもとに立ち帰らせる、特別な存在であることを強調している（ルカ1:15-16）。さらに天使は、ヨハネはエリヤの「霊と力」によって主に先立って行き（マラ3:23参照）、父たちの心の子らに立ち帰らせ、逆らう者たちを義しい人々の考えに至らせて、準備のできた民を主のために用意すると述べる（ルカ1:17）。おそらく、元来の伝承の文脈においては、ヨハネは「主」（=神）に先立つエリヤと見なされていたと考えられるが、ルカは「主」（κύριος）をイエスの意味で捉え、洗礼者ヨハネをイエスの道を準備する先駆者として描き出そうとしている。
- (2) ヨハネの母エリサベトとイエスの母マリアの出会いについて記された箇所（ルカ1:39-45）においては、年長者のエリサベトが年下のマリアに対して「私の主のお母さま」と呼びかけて彼女を祝福し、さらには、イエスを身ごもっていたマリアの挨拶を聞いて、エリサベトの胎内の子（=ヨハネ）が踊ったと記されていることから、イエスがヨハネに優る存在であることが明らかに示されている。
- (3) ザカリヤの賛歌によると、「至高者の子」と呼ばれるイエスに対して（ルカ1:32）ヨハネは「至高者の預言者」と呼ばれ、主に先立って行き、その道を整え、罪の赦しによる救いをその民に告げ知らせる存在として描かれている（ルカ1:76-79）⁵。ルカ1:17の場合と同様、ここでの「主」も、元来の文脈では神を指していたと考えられるが（マラ3:1; イザ40:3）、直後の「主の民」（ルカ1:77）という表現にも示されているように、ルカの文脈ではイエスを指している（ルカ1:43参照）。そのように、ルカによるとヨハネの使命は、イエスによっても

5 注目すべきことに、ヨハネの活動において中心的意味をもつ「洗礼」については、ここでは触れられていない（使10:37; 13:24参照）。

たらされる救いへの道を備える点にある⁶。

- (4) ヨハネ誕生の記述は、彼の成長について記す要約的報告（ルカ1:80）によって結ばれるが、これは明らかにイエスの成長の記述（ルカ2:40, 52）と並行している。もっとも、イエスの成長に関する記述は、幼子が知恵に満ち、神の恵みを受けていたと述べる点において、ヨハネのそれを凌駕している。

以上の点からも明らかのように、誕生物語においては、ヨハネとイエスの並行性は顕著であるが、それと共に、イエスの先駆者としてのヨハネのイメージも強調されており、最終的にはヨハネに対するイエスの優越が強調されている⁷。しかしそれでも、ここではヨハネが総じて高く評価されている点是否定できないであろう。

1.2. ヨハネの宣教活動（ルカ3:1-20）

前述の誕生物語に続いて、洗礼者ヨハネの宣教活動について記すこの段落は、①ヨハネの召命（1-6節）、②ヨハネの説教（7-18節）及び③ヨハネの逮捕（19-20節）の3つの部分に区分され、ヨハネの説教の箇所には、終末的（黙示的）説教（7-9節）、倫理的説教（10-14節）、メシア的（キリスト論的）説教（15-17節）という、それぞれ異なる主題の3つの説教が含まれている。この段落は、マルコ1:2-8、マタイ3:1-12及びヨハネ1:19-28に並行し、複数の資料からの記述が複雑に絡み合う

6 この記述の直後に、高い所から訪れて暗闇と死の陰に座っている人々を照らし出し、彼らの歩みを平和の道へと導いていく「曙の光」（ἀνατολή）について述べられている（ルカ1:78-79）。この曙の光は、元来の文脈ではヨハネを指していたと考えられるが、ルカの文脈ではむしろメシアであるイエスを指している。

7 この点は、両者の誕生について並行して記されながらも、特に後半においては、イエスに関する記述に多くの行数が割かれている、この誕生物語の全体構成においても示されている。

8 ルカ1:80と密接に関わる冒頭の1-2節はルカの編集句であり、イザヤ書の引用句を含む3-6節は全体としてマルコ1:2-4に依拠しているが、Q資料の影響も考えられる（マタ3:2-3参照）。厳密にマタイ3:7-10に並行する7-9節はQ資料に由来し、並行記事が見られず、多くのルカ的表現を含む10-14節は全体としてはルカによる編集と考えられるが、貧しいパレスチナの社会状況を前提とする10-11節は伝承（ルカ版Q?）に遡る可能性も考えられる。15-16節a及び18節はおそらくルカの編集句であるが、16節bcdはマルコ1:7-8とQ資料（マタ3:11参照）が結合する形で構成されており、17節はQ資料（マタ3:12参照）に、結びの19-20節はマルコ6:17-18に由来する。

形で構成されているが⁸、ルカは主にマルコ及びQ資料を用いて、この箇所全体を編集的に構成したものと考えられる⁹。

- (1) マルコやマタイによると、人々がユダヤやエルサレムから¹⁰荒野にいたヨハネのもとにやって来たのに対し（マコ1:5//マタ3:5）、ルカにおいては、ヨハネ自らが荒野から（ルカ1:80参照）ヨルダン川の周辺地域に赴いて、悔い改めの洗礼を宣教したと記されており（ヨハ1:28; 3:22-23参照）¹¹、ヨハネは一種の巡回説教者として描かれている¹²。
- (2) マルコとマタイが、ヨハネが人々に授洗したことを早い段階で言及しているのに対し（マコ1:5; マタ3:5-6参照）、ルカにおいては暗示されるにとどまっている¹³。事実、ルカはヨハネを洗礼者としてよりも説教者として描いており、洗礼そのものの意義は相対化されている。さらにルカは、マルコやマタイとは異なり（マコ1:6; マタ3:4参照）、ヨハネの奇異な服装及び食生活については触れていない¹⁴。
- (3) ルカもマルコやマタイと同様、ヨハネの登場の場面でイザヤ40:2-3の「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」という部分を引用しているが¹⁵、各福音書記者は、旧約においては神の意で用いられている「主」をイエスの意味

9 この段落の詳細な資料分析については、拙論「洗礼者ヨハネの説教—ルカ3:7-18の積義的考察」『キリスト教と文化研究』（関西学院大学キリスト教と文化研究センター）第13号、2011年、25-27頁を参照。

10 コンツェルマン『時の中心—ルカ神学の研究』田川建三訳、新教出版社、1965年、32頁によると、ルカはイエスとヨハネの活動領域を明瞭に区別し、ヨハネを専らヨルダン川に結びつけており、ヨハネに関わる箇所では「エルサレム」や「ユダヤ」を削除している。

11 このようにルカは、（ルカ3:4; 7:28にも拘わらず）ヨハネの召命の場所としての荒野と宣教の場所としてのヨルダン川流域とを明確に区別している。

12 コンツェルマン、前掲書、31頁。

13 ルカは後続の段落において初めて（ルカ3:21）、ヨハネがすべての民に洗礼を授けていた事実を報告している。

14 もっとも、ヨハネが飲食に関して禁欲的であったという点は、ルカ1:15; 7:33において示されている。

15 これに対してヨハネにおいては、「主の道をまっすぐにせよ」（ヨハ1:23）というように、その中の一部のみが引用されている。

で捉え直している。また、ルカのみが、この箇所が続けてイザヤ40:4, 5bを引用しているが、不均衡の是正を示唆する「すべての谷は埋められ、すべての山と丘は低くされる」(5節)という表現は、ルカの社会倫理思想の特質を示しており、6節の「人は皆、神の救いを仰ぎ見る」という引用句は、ルカの普遍的救済思想に対応している(ルカ24:47; 使28:28参照)。その意味でも、ルカはヨハネを単なる悔い改めの説教者としてではなく、神の救いの宣教者として描こうとしている。

- (4) ルカ特有の記述である、いわゆる「身分説教」(10-14節)は、ヨハネと三種の人間集団(群衆、徴税人、兵士)との三重の対話から成り、それぞれの対話が、「私たちは何をすればよいのですか」という問いと、それに対するイエスの答えから構成されている。この箇所は、直前の悔い改めの説教(7-9節)を受け、悔い改めにふさわしい実の具体的内容を示しているが、ここで要求されているのは、犠牲奉献、祈り、断食等のユダヤ教における伝統的な悔い改めの業ではなく、下着や食べ物を持たざる者に分け与え¹⁶、規定以上の税金を取り立てず、金をゆすり取ったり騙し取ったりするなという、いずれも所有に関わる倫理的行為である¹⁷。その意味でも、ルカはここでヨハネの宣教内容を、終末や裁きの視点よりもむしろ社会的・倫理的視点から描き出しているが、まさにこの点は、ルカ福音書におけるイエスの宣教内容の特質と一致している(ルカ6:27-38; 11:39-41; 12:13-21; 14:12-14; 16:19-31; 19:1-10参照)。
- (5) 全体として伝承に由来する16-17節では、ヨハネが水で洗礼を受けるのに対して、イエスは聖霊と火で洗礼を受けて裁きを実行し、ヨハネはイエスの履物のひもを解く値打ちもないというヨハネ自身の証言が見られることから(マ

16 衣服や食事を分け与えるようにとの要求は、旧約及びユダヤ教文書に頻出するが(ヨブ31:16-20; イザ58:7; 18:7; 1:17; 4:16等を参照)、使徒行伝における財産共有の記述(使2:44-45; 4:32-37; 5:1-11)とも関連している。

17 ルカはマタイとは異なり「実」を複数形(καρπούς)で表現しているが、それによって様々な倫理的な「良い業」が意図されているのであろう(P. Hoffmann, *Studie zur Theologie der Logienquelle* (NTA NF 8), Münster 1972, pp. 17-18; M. Wolter, *Das Lukasevangelium* (HNT 5), Tübingen 2008, p. 159)。

コ1:7-8参照)、ヨハネに対するイエスの優位が明らかに示されている¹⁸。その一方でルカは、ヨハネがメシアではないかと民が考えていたという記述(15節)や、ヨハネが(イエスと同様)民に福音を告げ知らせた(εὐαγγελίζομαι)という記述(18節)¹⁹を編集的に付加することによって、ヨハネとイエスの関連性を強調している。

- (6) ルカのみが、イエスの洗礼の前にヨハネの投獄(19-20節)について言及しているが、これは、両者の宣教時期を区別しようとするルカの意図によるものであろう²⁰。さらに、誰がイエスに洗礼を受けたかについて、ヨハネ以外の人物は想定しにくいとはいえ、ルカはこの点について明確に述べておらず、また、イエスの洗礼の記事をヨハネの投獄の記事の後に置くことにより、そのような想定を遠ざけている。ここには、ヨハネがイエスの上位に位置づけられることに対する抵抗があったとも考えられるが、あるいは、ヨハネの授洗行為そのものに対してルカが無関心であったためかもしれない。

この段落においてもヨハネはイエスの先駆者として描かれており、ヨハネに対するイエスの優位は明らかであるが、それと同時に両者は密接に関連づけられている。またヨハネの宣教については、洗礼そのものよりも悔い改めの結実に焦点が当てられており、その意味で、ここに描かれているヨハネの宣教内容は、ルカ福音書におけるイエスの宣教内容と同様、明らかに社会的・倫理的な特質をもっている。

1.3. ヨハネとイエス (ルカ7:18-35)

ヨハネとイエスの宣教内容の特徴及び両者の関係について述べるこの箇所は、

18. ルカがマルコ1:7の ὀπίσω μου (私の後から) を削除したのだとすれば、それはイエスをヨハネの後継者のように位置づけられることへの抵抗のためかもしれない(もっとも、使13:25を参照)。
19. もっとも、ルカにおいては、ヨハネによる神の国宣教については全く触れられていない(マタ3:2参照)。

20. その一方で、ルカはヨハネの死については直接触れておらず(マコ6:19-29参照)、それについて暗示するのみである(ルカ9:7-9参照)。

①洗礼者ヨハネのイエスへの問い（18-23節）、②ヨハネに関するイエスの証言（24-28節）、③今の時代に対するイエスの非難（29-35節）の3つの部分から構成されている。この箇所は概ねマタイ11:2-11, 16-19に並行しており²¹、総じてQ資料に由来すると考えられる²²。

- (1) イエスが「来るべき方」であるかどうかを尋ねに来たヨハネの弟子たちに対し、イエスは、病人や障がい者が癒され、死者が生き返り、貧しい人に福音を告げ知らされている様子をヨハネに伝えるように指示しているが（22-23節）、ルカは、そのときイエスが病氣や悪霊に苦しんでいる人々を癒していた（21節）という描写を付け加えることにより、ヨハネの使者たちをイエスの宣教活動の証人として描いている。またこの箇所では、ヨハネが期待した「来るべき方」（再来のエリヤ?）とイエスが示した自らの宣教活動との差異が示されており、両者の宣教内容が本質的に異なるものであることが示されている。
- (2) マタイと同様ルカにおいても、ヨハネはイエスの道を準備するために遣わされる使者であり（マラ3:1参照）、預言者以上の存在であり、女性から生まれた者の中で最も偉大な者（ルカ1:15参照）であるとイエスは証言している（26-28節）。しかしその一方で、そのヨハネも神の国で最も小さな者より劣っていると述べることにより、ヨハネは神の国に属さず、その偉大さは限定的であることが示唆されている。
- (3) ルカに特有の記事である29-30節（マタ21:32参照）では、ヨハネの教えを受け入れて洗礼を受けた民及び徴税人と、拒絶したファリサイ派、律法学者とが対比的に描かれている²³。ここでは、ヨハネの宣教を受け入れることが神の御心を受け入れることと同定され、その意味で、ヨハネの宣教はイエスの宣教と並行するものとして捉えられている。

21 ルカのテキストに欠けているマタイ11:12-15の内、12-13節はルカ16:16に並行している。

22 その一方で、民と徴税人の受容とファリサイ派と律法学者の拒絶について述べたルカ7:29-30に並行する記述は、このマタイの文脈には見られず、マタイ21:31b-32に対応する記事が見られる。

23 マタイの並行箇所（マタ21:31b-32）では、ヨハネを信じた徴税人や娼婦たちと、信じなかった「あなたがた」（=ユダヤ教指導者たち）とが対比的に描かれている。

- (4) マタイと同様ルカにおいても、飲食に対して禁欲的な態度を取るヨハネと、そうでないイエスとが対照的に描かれているが(31-35節)、今の時代の人々に受け入れられないという点で両者は共通しており、その意味で両者は対置されるというよりは並置されている。

以上の点からも明らかなように、この段落においてもヨハネは、一面においてはイエスと同等であるかのように並置して描かれているが、そのように並置されつつも、最終的にヨハネは、イエスの道を備える先駆者としてイエスの下に位置づけられている。

1.4. その他の箇所

洗礼者ヨハネについては、上記の箇所以外にも、ルカ福音書の中で幾度か言及されている。

- (1) ヨハネの弟子については、前述の7:18以下の箇所の他に、ルカ5:33及びルカ11:1においても言及されている。前者はマルコ2:18及びマタイ9:14に並行し、マルコに由来する。マルコにおいては、ヨハネの弟子やファリサイ派の弟子が断食しているのに対し、イエスの弟子が断食しないことへの人々の疑問について述べられており、ルカも基本的にマルコの記述に従っているが、ルカにおいては「断食」に「祈り」が加えられている。ルカ11:1では、ヨハネが弟子たちに教えたように自分たちにも祈りを教えて欲しいというイエスに対する弟子たちの要望が述べられているが、これはそれ以下の一連の祈りに関する語録(ルカ11:2-4, 5-8, 9-13)の導入句としてルカが構成した編集句と考えられる。双方の箇所で祈りが主題となっていることから明らかなように、ルカはヨハネの弟子たちと祈りとを結びつけ、彼らの祈りの習慣を強調しようとしている。
- (2) イエスの噂を聞いて戸惑うヘロデについて述べられたルカ9:7-9では、イエスをヨハネやエリヤ、あるいは昔の預言者の生き返りと見なす人々の噂につ

いて記されている。マルコにおいては、ヘロデはイエスをヨハネの生き返りと見なしているが、ルカにおいては、ヘロデ自身はその可能性を否定している。なお、イエスを洗礼者ヨハネと見なす人々の噂については、ルカ9:19においても言及されている。

- (3) ルカ16:16には、律法と預言者はヨハネの時までであり、それ以来、神の国の福音が告げ知らされていると述べられ、確かにここでは、H. コンツェルマンが指摘するように、律法と預言者が重要性を保っていた古い時代と神の国の福音が告げ知らされる新しい時代とが明らかに区分され、ヨハネは古い時代を締めくくる機能を果たす存在であるかのように述べられている²⁴。もっとも、そのようなヨハネの位置づけはルカ文書全体を通して一貫して見られるわけではなく²⁵、むしろ彼は古い時代から新しい時代に至る、二つの時代を橋渡しする過渡期的な存在²⁶として描かれている。
- (4) エルサレム入城後の場面では、ヨハネについては、「権威についての問答」においてのみ言及される（ルカ20:4, 6）。この箇所は基本的にマルコ11:27-33及びマタイ21:23-27に並行し、マルコに由来する。ここでイエスは、権威に関する敵対者の問いに対して、ヨハネの洗礼は、天からのものか、人からのものかと反問しており、この問いかけに対して彼らは返答に窮している。

ここにあげた箇所においても、ヨハネは一方ではイエスと同様に高く評価されているが、他方において、イエスとの比較においてその評価は限定づけられており、その意味では、共通性と異質性の双方の観点がここにも認められる。

²⁴ コンツェルマン、前掲書、(特に) 30-47頁を参照。

²⁵ ヨハネとイエスの誕生について交互に記述されている前述の誕生物語がまさにこの点を示している。

²⁶ Ernst, op. cit., p. 53は、ヨハネをこれらの二つの時代にまたがる「過渡的人物」(Mann des Übergangs) と特徴づけている。

2. 使徒行伝における洗礼者ヨハネ

使徒行伝においてヨハネ（Ἰωάννης）は計9回言及されており（使1:5, 22; 10:37; 11:16; 13:24, 25; 18:25; 19:3, 4）、福音書とは幾分異なる傾向を示している。

- (1) 使徒行伝の冒頭には、復活したイエスが使徒たちに約束の聖霊を待つよう指示する場面が描かれているが、その際イエスは彼らに、ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは聖霊による洗礼を授けられると予告しており（使1:5）、このイエスの言葉は、異邦人コルネリウスの洗礼に関するペトロのエルサレム教会への報告の中でも引用されている（使11:16）。また、第一伝道旅行の際にピシディア州アンティオキアを訪れたパウロは、説教の中でヨハネについて触れ、イエスが登場する以前、ヨハネはイスラエルの民全体に悔い改めの洗礼を宣べ伝え、自らは後から来る方（＝イエス）の履物を脱がせる値打もないと証言したと語っている（使13:24-25）。以上の箇所は、ルカ3:16のヨハネの発言の反復であり、ヨハネに対するイエスの優位を改めて示しており、さらに、ヨハネがその生涯の終わりに自分の後から来るイエスについて語ったと伝える使徒行伝13:25の記述は、両者の活動の時期的差異を示唆している。
- (2) 十二使徒の欠員補充の場面で、使徒となるべき人物の条件として、ヨハネの洗礼の時からイエスが天に挙げられるまで共にいた者という点があげられている（使1:21-22）。また、ペトロはコルネリウスの家で語った説教の中で、イエスの業を、ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、カリラヤに始まり、ユダヤ全土に起きた出来事として説明している（使10:37-38）。これらの箇所は、ヨハネの活動がイエスの宣教の文脈に組み入れられているという意味で、ヨハネとイエスの連続性を示している。
- (3) 使徒行伝の後半部分では、ヨハネについては数回触れられるのみであるが、これらの箇所には、ヨハネの洗礼しか受けていない弟子たちのことが言及されている。例えば、アレクサンドリア出身のアポロは、イエスについて詳しく語り、教えていたにも拘わらず、ヨハネの洗礼しか知らなかったと述べら

れている（使18:25）²⁷。また、パウロがエフェソで出会った十二人ほどの弟子たちもヨハネの洗礼しか受けておらず、聖霊を受けていなかったため、パウロは、ヨハネは後から来るイエスを信じるように悔い改めの洗礼を授けたのだと説明し、その結果、彼らは主イエスの名によって洗礼を受けたという（使19:1-7）。ヨハネの洗礼しか知らず、聖霊の存在を知らない（使19:2）キリスト者が実際に存在したとは考えにくく、その意味でも、これらの記述は、ルカが両者を関連づけるために作り上げた設定であると考えられる²⁸。

以上の点からも、使徒行伝のヨハネ像にも、ヨハネに対するイエスの優位と両者の時期的差異を強調する側面と、両者の連続性（並行性）を強調する側面の双方の面が確認できる。なお、ヨハネの洗礼しか知らない弟子たちへの言及は、当時のキリスト教会内に、かつてヨハネの弟子であった者が少なからず存在していたことを示しているのかもしれない²⁹。

3. ルカのヨハネ像の特質

以上の検討から、ルカ文書におけるヨハネ像の特質について、以下のようにまとめられる。

1. ルカにおいても他の福音書と同様、ヨハネに対するイエスの優位は明らかであり、水で洗礼を授けるヨハネと聖霊で洗礼を授けるイエスとが対比的に描かれている。さらにルカは、両者の活動時期を意識的に区別することにより（ル

27 このアポロに関する記述については、佐藤研「アポロ伝小史」『はじまりのキリスト教』、岩波書店、2010年、113-126頁を参照。

28 ここで言及されている弟子たちは、エフェソ教会における洗礼者ヨハネ派のグループに属する人々を指しているのであろう（荒井献「新約釈義 使徒行伝 59」『福音と世界』（2010年6月号）、新教出版社、78頁及び吉田、前掲書、157-158頁を参照）。

29 ヨハネ福音書によると、最初にイエスに弟子入りした二人の人物（うち一人はペトロの兄弟アンデレ）はいずれも洗礼者ヨハネの弟子であった（ヨハ1:35-37）。

- カ3:20; 16:16; 使13:25参照)、この対比をより一層際立たせている。
2. その一方で、ルカにおいてはヨハネとイエスの並行性も顕著であり、両者はしばしば同じ文脈の中に関連付けられ、ヨハネは時としてイエスと並ぶ存在として描かれている。その意味において、ルカにおいてヨハネは比較的高く評価されている。
 3. 以上のことから、ルカにおけるヨハネとイエスの関係は、両者の対照性(異質性)と並行性(共通性)、換言すれば、その本質や活動時期における断絶と宣教内容における連続の双方の要素を含んでおり(ルカ3:15-18参照)、その双方の意味において、ヨハネはイエスへと橋渡しする「先駆者」として描かれている³⁰。
 4. ルカにおけるヨハネは、洗礼者としての側面よりも倫理的教師としての側面が強調されており(ルカ3:5, 10-14参照)、さらに祈りとの結びつきが強調されている(ルカ5:33; 11:1参照)
 5. 使徒行伝18-19章におけるヨハネの洗礼しか受けていない弟子に関する記述は、当時の教会に元々ヨハネの弟子だった信徒が存在していたことを示唆している。

30 これに対して、コンツェルマン、前掲書、41-42頁は、ヨハネがイエスの終末論的(黙示文学的)先駆者(*der Vorläufer*)であるという点を否定している。確かに、ヨハネをエリヤと見なす視点はルカにおいては弱められているが、先駆者としてのヨハネ像そのものが取り除かれたわけではない。むしろ、このような彼の理解は、ヨハネが属する古いイスラエルの時代とイエスが属する新しい時代を厳密に区別しようとする彼のテーゼから導き出されたものであろう。コンツェルマンに対する反論については、Fitzmyer, *op. cit.*, pp. 106-110を参照。